

が火砕流堆積物である。阿蘇カルデラの噴出物は、火砕流堆積物が大部分である（松本征夫・松本幡郎編『阿蘇火山』東海大学出版会 昭和六〇年）。

4 大分大学地理学教室「臼杵湾南岸の突ん棒漁村」（『大分県地理第一集』昭和四六年）。

5 『大分県における突棒漁業』（三浦光信蔵）。

6 （5）に同じ。

紙面の都合で「東神野の山地集落」以降は次号に回しました。ご了承下さい。

編集者

## 表紙解説

# 道 祖 神

道祖神と言えば安曇野（あずみの）が思い出される。

土地の人は道祖神の故郷は安曇野であると言う。確かに様々な形をした神々が道行く人に微笑み掛けているかのように、あちこちに座している。

この安曇野は東西約九キロ南北約三十キロという広い地域である。以前は安曇平とっていたが、戦後、俄かに有名になり、安曇野となったらしい。

ここには、約九百体もの道祖神が祀られているという男女二神並立形、合掌形、握手形、抱き寄せ形、酒器を持つ婚礼形などなど。中でも変わった道祖神が明科町池桜にある。有明な接吻道祖神で、女神の方が男神の手を握り、舌を吸う形で顔は冥想のぼかし彫りである。

では、道祖神は何の神か？ 安曇野では子孫繁栄の神であり、縁むすびの神でもある。また、旅の守り神、災難除けの神、悪霊や災難に立ち向かい「塞」ぎをする神でもあると云う。

この道祖神の祭には伝統的な物語や行事が多い。その中の一つ『三九郎』の「おんべ焼」（火祭）について次のような事が云われている。

昔、農民が背負ってきた重税・凶作・疫病の三つの苦勞をもじって『三九郎』というようになった。

写真は、穂高町で写したもので、伝説は穂高神社で聞いたものである。

写真並びに説明 軸丸 勇